

SNE-T

筑波大学附属学校教育局 特別支援教育連携推進グループ

No 19
2024.3



Magnolia season

→ <https://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp/snerc/>

巻頭インタビュー：青木隆一先生（筑波大学附属視覚特別支援学校校長）

授業は一回だけの真剣勝負

本号では、筑波大学附属視覚特別支援学校校長の青木隆一先生にお話を伺います。



先生のこれまでのご経歴を教えてください。

生粋の千葉県人です。九十九里浜の波音を聞きながら、東京五輪後に生まれました。子供の頃から「おっぺす」や「～だっぺよ」という九十九里弁を使い、学校から帰ってくると宿題もせず、海でハマグリやナガラミを採っていました。卒業した小学校の校歌が「おーいと呼べば 太平洋がどどんと答える この学び舎は」で始まることから、いかに海に近い場所で育ってきたかをお分かりいただけるかと思います。

そんな少年が学校の先生になりたいと思うようになります。きっかけは「3年B組金八先生!」。初代シリーズ放映時はまさに中学校3年生（3組でしたが）で、毎日の学校生活、受験、友人関係、初恋といった自分自身の悲喜交交と同じ光景がブラウン管に映しだされています。それを坂本金八という先生が不器用ながらも、生徒とぶつかりながら一つ一つ解決していく。「こんな先生になってみたい」それが原点でした。金八先生にあこがれていたわけですから、もちろん中学校教員を目指しました。ドラマの影響もあってか、学校は勉強だけじゃない、生徒指導が大事だ、やんちゃな生徒は部活動で鍛えるぞ等、イメージ先行でしたが、千葉県中学校教員採用選考に無事合格。しかし、赴任先は中学校ではなく、大きな病院に併設された仁戸名養護学校だと通知が来ました。初めて耳にする学校名でした。自分はその学校で何をやるの？ どんな生徒がいるの？ 部活動

はあるの？ 正直、落胆と不安と疑問を抱えながらの教職人生がスタートしました。しかし、長期入院を余儀なくされ、将来の希望が持てない生徒たちと接するうちに、中学校教員になれなかったと落胆していた自分を恥じるようになりました。厳しい治療が優先となり、限られた時間内でいかに分かりやすく勉強を教えていくか、病気に打ち勝とうとする気持ちをいかに引き出していか日々考えました。ここから一人一人の子供たちに焦点を当てた特別支援教育にはまっていくこととなります。

次の勤務校が千葉盲学校。全く予期せぬ異動でしたが、ライフワークとも言える視覚障害教育に出会った（はまった）わけです。着任当初は驚きの連続で、見えない・見えにくい子どもたちへの教育の奥深さに魅了されました。長期研修で歩行訓練士の資格も取得し、在任10年間を自分なりに全力投球。附属盲学校の研究会や研修会にも幾度となく参加し、刺激を受け多くのことを学ばせていただきました。その節はありがとうございました。その後、再び異動となってしまいました。離任式で「必ずもどってきますから」と誓い、県教育委員会—小学校教頭—県教育委員会—文部科学省—県教育委員会と随分遠回りをして、昨年度、念願かなって15年ぶりに千葉盲学校に校長として戻って来ることができました。そして縁あって本年度から校長として本校でお世話になっています。私には、大学で特別支援教育や視覚障害教育を目指し学んだという経歴はありません。その時々の流れに逆らわず、自分なりに向き合ってきただけです。そんな自分が伝統ある本校の校長をしている人生とは不思議なものだと感じています。

これまで取り組まれてきたお仕事についてお聞かせ聞かせください。

振り返ってみると、視覚障害教育以外に多くの業務に携わってきました。自分でも驚くほどです。主なものを挙げてみると県教育委員会では、人事・定数管理、教員採用選考、医療的ケア体制整備、就学相談、学校事故裁判、県議会、第3次千葉県特別支援教育推進基本計画及び特別支援学校整備計画の策定など。文科省では、文部科学省著作点字教科書関連、高校通級の制度設計と法令整備、10年に一度の学習指導要領改訂に関する業務が深く印象に残っています。突然言い渡された予期せぬ仕事もたくさんありましたが、組織人である以上は、職務上の命令として遂行しなければなりません。やったこ

仕事に誇りを持って

とがないからは通用しません。実際、医療的ケアも事故裁判も業務遂行に必要な知識・経験がなかったのですが、資料を熟読し、分かる人に聞き、同僚・上司への報連相を密にして、なんとかやり切ることができました。エピソードの一つ。人事業務はその教員の人生がかかっていますので失敗は許されません。しかし、法令上認められない申請を認めてしまったことがありました。完全な私のミスで、その人の損害額は数百万。事態収拾に努めました。難航しました。その時、上司が「たいした問題ではない。最終決裁をした俺がなんとかする」と言ってくれたのです。実際はたいした問題だったのですが、その言葉にどれだけ救われたことか。私も責任を取れる校長になりたいと思っています。

教育現場で大切にしてきたこととは何でしょうか。

教師の本分である授業です。教師には他にも多種多様な業務があり、働き方改革の観点からも負担軽減が叫ばれています。しかし、授業そのものが負担であるとか、軽減させようという流れではありません。昔から「授業は45分・50分の真剣勝負」と口にしてはいますが、次のようなきっかけがあります。

先に紹介した仁戸名養護学校で癌疾患の生徒を担当しました。病室で雑談半分、勉強半分のゆるい授業をしていましたが、ある日、主治医から「彼は、あと数回しか授業を受けることができません。彼が最後に、勉強できてよかったと思えるような授業をしてあげてください」と言われたのです。彼にどんな授業をすればいいのだろうか。その時に頭にうかんだのが、「授業は真剣勝負」だったのです。最後の授業は20分程度だったでしょうか。単元は覚えていませんが、お互い真剣に授業に臨みました。病室を出た後、涙が止まりませんでした。我々教師は授業を通じて児童生徒と向き合います。教師にとっても、児童生徒にとっても一つ一つの授業は一回だけの真剣勝負。日々その姿勢を持ち続けたいと、ずっと大切にしてきました。亡くなった彼への約束のようなものです。

教師になって良かったと感じた出来事についてお聞かせください。

そうですね。一般的には、自分の指導により児童生徒の成長が感じられた瞬間という答えになるでしょう。これから教師になっていく若い皆さんには、

この瞬間をたくさん感じ取れる教師になっていただきたいです。

私は、卒業式や結婚式などの節目で「青木先生がいてくれたから～」と言われたとき、涙腺が緩み「金八先生を目指してきてよかったな」と思います。

特別支援教育に携わる先生方へ一言お願いします。

特別支援教育に携わる先生方へというより、全ての先生方へとなりますが、いつも本校の先生方に伝えていることを紹介します。

「1に健康、2に家庭・家族、3、4がなくて、5に仕事」自分自身が健康であること、そして自分の家庭や家族を大切にすること、これができなければいい仕事はできません。まずは、1と2を大切にしてください。

さて、5の仕事の話ですが、障害のある子どもたちに対する教育の「やりがい」とはなんですか？ くり返しになりますが、できないことができるようになった、よりよい変化や成長が感じられたときにやりがいを感じるという方が多いのではないのでしょうか。このやりがいは障害の有無に関係ないですね。違いがあるとすれば、障害の種類や程度等にもよりますが、その変容が微小であり、教師がよく見ていないと気が付きにくいことでしょうか。難しいことかもしれませんが、子どもたちが僅かに見せてくれる変容に気づき、素直に喜べる教師になっていただきたいです。この姿勢がしっかりしていれば、特別支援教育の専門性は自ずとついてきます。

そして、最後に一言。この尊い仕事に誇りを持ってください。



海外からのお客様をお迎えて

このインタビューは2024年2月に筑波大学附属視覚特別支援学校の校長室で行われました。

（聞き手：連携推進グループ 中村里津子）

附属学校実践紹介

附属学校の日常的な実践の中には、素晴らしい取組がたくさんあります。

一人一人のニーズを見極める力と実践力、 そして自らが新しい学びを求める意欲

～附属聴覚特別支援学校 小学部 佐渡 雅人 先生～

附属聴覚小学部の佐渡雅人先生にお話を伺いました。電車で通勤されていますが、市川駅からはジョギングをして学校に通うスポーツマンでもあります。上海日本人学校にも勤務された経験があり、そこでの話も伺うことができました。

まず、ご経歴から教えてください。

生まれは北海道の道東、十勝地方の帯広市です。上京して東京の大学に入り、卒業後は神奈川の教員として採用されました。最初の赴任校が神奈川県立座間養護学校でした。重度心身障害の学校で、あまり専門知識はありませんでしたが、やればやるだけ子供たちがいろいろなことをできるようになりました。九州大学の成瀬先生の動作法っていうのがあります。関節の可動域を広げるのに、体の動きの仕組みを知っていればできるようになります。みんなで勉強会をしました。

平塚ろう学校に異動になりますが、そこではどのような実践をされましたか。

平塚時代はたくさんの方を学びました。国立特別支援教育総合研究所でも1年間研修を受けました。そのときに学んだのがキョードスピーチです。本校の場合、幼稚部での指導もあって、口形でもある程度分かります。しかし中にはスケールアウトのケースもありますから、聞こえが厳しい状態だと、たくさん視覚的な情報を提示していただくのが分かりやすいと思っています。現在もその指導法は大切にしています。それから、手話も勉強したほうが良いと思い横浜国立大学の大学院に入りました。当時の研究をまとめたのが「読売教育賞」につながりました。聞こえる子供も聞こえない子供も、両親聾の子供も一緒になって授業す



るためには、手話や口話だけでなく、共通化するために絵を使ったら良いのではないかと。いろいろな実践を試みました。

小学部での実践について教えてください。

低学年は生活言語でのやり取りが中心です。生活、行事の言葉、例えば2月だったら「節分」、「豆まき」、「鬼は外」、「福は内」、いろんな行事の言葉があります。慣用句なども意識しながら、日本の文化だとか、言葉に関していろいろやり取りしていきます。それが中心で、教科指導はその延長線上にあるという感じです。

ただ、算数に関しては少し難しい面があります。「+」とか「-」という記号は言語としてはあまり使いません。「もらう」とか、「あげる」とかだったら分かるのですが、単に「+」「-」と言われても何のことかよく分からないのです。そこで「飛んできたよ」、「増えたよ」、「増えたから足し算になるんだよ」というような教え方をしています。算数指導も言葉が大切です。例えば3-2と書くとすぐに答えは出せるのですが、言語になったときに3から2を取るというときの「から」という助詞が分からないことがあります。文章題が難しいと言われるのですが、文章が複雑になるという以前に助詞でつまづくケースもあるのです。



上海の日本人学校でも教鞭を執られましたが、そこでの経験についてお聞かせください。

低学年を持たせてもらい、やはり生活言語を中心に指導をしました。しかし、日本の行事のことを知らない子供がいました。鯉のぼりを立てる際の、「矢車」とか、「吹流し」とか、「五月人形」もそうだし3月の節句の「三人官女」「五人囃子」とか。歌に出てくるよと言っても、普段使わない言葉なので定着していませんでした。「春一番が吹いたね。」と言っても、春一番ってなんだろうという感じでした。それで「春一番が吹きました。もう季節は春になりました。」という内容のプリントを出したら、日本人のお母さんたちから「家でも参考になります。」という感想をもらいました。中国の方は、当たり前ですが、もっと知りません。「春一番って何ですか。」と聞かれます。暖かい風、南風、そう言えば上海でもそんな風は吹くかもしれないとか。でも、言葉ってそういうふう覚えていくのではないのでしょうか。聴覚特別支援学校での実践は、中国語環境、第2外国語として日本語を学ぶ人たちにとって、とても有効でした。

中国の方も学んでいらっしゃるのですか。

日本人学校はお父さんお母さんのどちらかが日本人であれば入れます。家では中国語を使い、学校にいるときだけ日本語。だからあんまり喋れなかつたりとか、読んだり書いたりできないので困っていますが、日本で就職させたい、世界に出ていくためには、日本語が必要と考えている方も多いです。毎日毎日プリントを出しました。自分の生活経験をもとにした読み取り教材なので、その日の出来事を中心に話をしながら続けていたら確



かに力をつけていきました。市販のプリントは脈絡がないし、今現在の生活とは関係がありません。文字がいっぱいあったところで、入ってこないのです。それまでのやり取りが分かるような内容にしておく必要があります。生活文、子供たちにとって身近なものを文章にして、それに対してのやり取りをしておくことが大切になります。

これからの聴覚特別支援学校の現場に必要なこととはどんなことでしょうか。

手話は聞こえない人たちの母語だから、教育も手話で行った方が良いということも言われます。同時に聴覚を活用した方が良いとも。しかし、どちらも成立する考えです。問題なのは、どちらか一方の全体主義に陥ることです。それでは子供たちがかわいそうです。聞こえ方にもいろいろあるので、一つの方法で決めつけて考えることには無理があります。特別支援教育は、一人一人のニーズに応えることが大事です。また、人工内耳の普及率が年々高くなっているのに、聞こえの面で二極化していくように思います。しかし、人工内耳をつけていても効果が現れない子供もいるわけで、状況を見極めた上で手話や絵などの視覚資料を使う場面を増やす必要があると思います。これからの専門性としては、「聴覚活用」、「手話」、「指文字やサイン」、「教科指導」、「重複障害」の知識やスキルが最低限必要になると思います。こうした条件を満たす先生を育てていかなければならないのではないのでしょうか。働き方改革もあり、制約もあるのですが、定期的に授業研を行い、互いに磨き合うことしかないと考えています。

(聞き手：連携推進グループ 橋本 時浩)

障害理解・啓発事業について

障害理解・啓発事業として、通常の学校に対しての出張授業を行っています。令和6年3月1日(金)には、お茶の水女子大学附属中学校(東京都文京区)で、第1学年を対象に体験授業を実施しました。今回は視覚障害・聴覚障害・肢体不自由の3つの授業を行いました。短い体験の時間でしたが、生徒達は各障害の疑似体験や介助方法等に真剣に取り組み、感じたことや気づいたことをお互いに言葉で伝えあう姿がみられました。それぞれが体験を通じて得られたことを、今後の中学校生活に活かしてもらえるように願っています。

また、この他にも筑波大学附属小学校3年生(文京区:東京キャンパスでの実施)や筑波大学附属駒場中・高等学校(目黒区)中2生、北区立小学校でも障害理解・啓発授業を行いました。



写真左から
白杖歩行訓練・ガイド歩行訓練
車椅子体験
難聴疑似体験

令和5年度第2回特別支援教育研究セミナーについて 「インクルーシブ教育システム下で活用できる教材・指導法を考える」

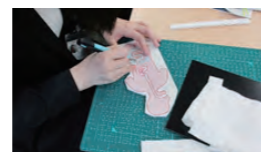
令和5年度第2回特別支援教育研究セミナーを1部と2部に分けて開催しました。1部は、令和6年2月23日(祝日)に国土館大学非常勤講師(元筑波大学附属視覚特別支援学校教諭)の山田毅先生を講師にお招きし、対面で教材ワークショップを実施しました。2部は、2月19日(月)～3月19日(火)にオンデマンドで開催しました。全国から630人の方が参加されました。オンデマンドセミナーは筑波大学附属障害5校の先生方の協力を得て、8編のビデオコンテンツを作成し実施しました。セミナーを通して深められた学びを今後の指導に活かしていただけだと考えています。



講義の様子



山田先生自作の教材



教材作成の様子



講義をする山田先生

令和5年度 現職教員研修について 「成果報告会及び修了式」

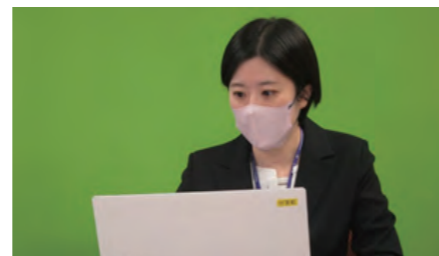
千葉彩也香先生の成果報告会が筑波大学東京キャンパスで行われました。千葉先生は「知的障害特別支援学校高等部におけるキャリア教育の視点から考える授業づくり」のテーマで研究に取り組んできました。調査と考察に基づく授業の構築、生徒の変容について等の発表を行いました。附属久里浜特別支援学校と附属大塚特別支援学校をZoomで結び、現場で指導に当たってくださった先生方、ともに汗を流した仲間の先生方が報告会にかけつけてくださいました。報告会に続き修了式が行われ、修了証書が授与されました。千葉先生、1年間本当にお疲れ様でした。北海道の教育を担う若手のリーダーとして、益々活躍されますことを祈念しております。



修了式を終えて(梶山先生、千葉先生、雷坂先生)



成果報告会の様子



成果報告をする千葉先生

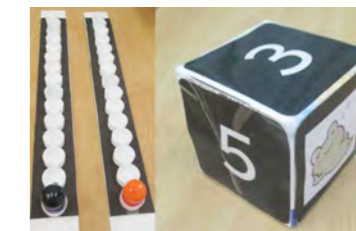
第4回教材・教具指導法コンテスト (木村賞2023)の結果報告



木村賞
「避難所シミュレーションボード」
附属桐が丘特別支援学校
社会科・地理歴史・公民科グループ



優秀賞
「ビー玉の転がる道」
附属視覚特別支援学校
小学部図画工作科 佐藤直子



優秀賞
「ちよくせんすごろく」
附属久里浜特別支援学校
高山真美

第4回『教材・指導法コンテスト(木村賞)』が決定しました。受賞作品3点は上記の通りです。今年度の選考対象作品は53点で、うち23点が1次審査を通過、各学校管理職の先生、5附属連絡会議構成員の先生、障害科学域の先生による2次審査で5点に絞られ、呑海教育長、雷坂次長、梶山教育長補佐の3名の先生の投票で「木村賞」1点、「優秀賞」2点が決まりました。木村賞を受賞した「避難所シミュレーションボード」は、避難所での支援の受け方、周囲との関わり方等、克服すべき課題が多いとされる災害時の生活について事前に学習し、行動の在り方を考えるための教材です。詳しい使用例は教材・指導法データベースからご覧ください。

なお、今回のコンクール終了時点で、教材数が619点になりました。提供していただいた先生方には心より感謝申し上げます。今後もデータベースの充実に努めて参りますので、ご協力くださいますようどうぞよろしくお願いいたします。

「データベース選集3 授業を豊かにする 筑波大附属特別支援学校の教材知恵袋 【応用・発展編】」の発刊について

当グループでは、「筑波大学 特別支援教育 教材・指導法データベース」を運用し、附属特別支援学校5校の授業で活用されている教材・指導法をweb上で発信しています。このたび、データベース上に掲載されている教材の中から障害種・学校種を越えて幅広く活用できる教材を選集した書籍「データベース選集3 授業を豊かにする筑波大附属特別支援学校の教材知恵袋【応用・発展編】」を出版いたしました。

各校の教材を、指導の目的や内容、教材の特徴、具体的な指導例等と一緒に、分かりやすく紹介しています。さらに読者の参考となるように、教材の材料や作り方、市販品については入手先の情報等も掲載しています。書籍を手にとられた先生方が、掲載されている教材を参考にしながら、担当されているお子さんにあわせて、アレンジしながらご活用いただける内容になっています。併せて、共生社会の形成に向けて、インクルーシブ教育システムの構築に関する論説や関連したコラムも多数掲載しております。

ぜひ日々の指導に本書をご活用いただければ幸いです。



出版社: ジアース教育新社
定価: 2,420円(本体2,200円+税10%)
編著: 筑波大学特別支援教育連携推進グループ

editorial Postscript

編 集 後 記

3学期は、障害理解・啓発の出張授業のため、通常学校に伺う機会がたくさんありました。まだ緩やかですがインクルーシブ教育システムに対する社会の意識の変革を感じているところです。

今年度第2回の特別支援教育研究セミナーでは、対面型に20人、オンデマンド型に630人の参加がありました。受講していただきました皆様にはこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

対面実施は4年ぶりでしたが、予想以上の参加者数でした。コロナからまた一歩抜け出すことができたことを本当に嬉しく思います。

書籍第3巻がいよいよ発刊となります。第1巻発刊以来の目標であった3巻シリーズがこれで完結となります。教材データベースの充実はこれからも図っていかなくてはなりません。教材のご提供について、ますますのご協力をお願いいたします。

本号では、筑波大学附属視覚特別支援学校の青木隆一先生に、お話を伺いました。「授業は一回だけの真剣勝負」のお言葉に教師としてのプロの流儀を感じた次第です。

橋本時浩

表紙「Magnoliai season」筑波大学附属学校教育局

SNE-T

Group for the Special Needs Education, University of Tsukuba

エスネット19号（通巻第67）2024年3月15日発行
発行 / 編集：筑波大学附属学校教育局特別支援教育連携推進グループ

〒112-0012 東京都文京区大塚 3-29-1

電話：03-3942-6923・6937 FAX：03-3942-6938

e-mail：snerc@gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp

<https://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp/snerc/>

©2023 筑波大学特別支援教育連携推進グループ（本誌記事の無断転載を禁じます）